

# リメディアルの観点から再考する実践的な英語教育

今村 怜

防衛大学校 専任講師

## 1. はじめに

日本は、入学者定員が入学希望者数を上回り、大学全入時代を迎えている。その結果として、一部の難関大学を除き、大学入試は選抜機能を失いつつある。大学を選ばなければ、誰もが大学に進学することが可能になった。実際に、短期大学部を含む大学への進学率は2018年度に57.9%を記録している。これは、日本の大学教育が、教育社会学者マーチン・トロウの唱える「ユニヴァーサル段階」に入ったということの意味する<sup>1</sup>。この段階では、多くの大学はもはやエリート教育機関としての機能を持たず、大学教育の主眼は大衆教育に置かざるを得ない。特に選抜力の低い私立大学では、かつてのような基礎学力を前提とした英語教育は意味を持たない<sup>2</sup>。そこで登場するのが英語リメディアル教育である。リメディアル教育は「大学授業の受講者として想定しているレベルに達していない学生に対して、補修的に学力の向上を図ることを目的とした教育」だと定義される（牧野2013:351）。ところが、清田(2013:213)によれば、英語リメディアル教育は十分な成果を上げていない。この点に関して、酒井(2016)は、学生に「面白い」と感じさせるような講義を行うことの必要性を説く。それでは、どのように英語を教授するべきであろうか。本論では、その点を具体的なレベルから考えてゆきたい。

## 2. 大学生の英語力

2018年の文部省の調査によると、高校卒業段階で英検準2級以上の学力を有している学生の割合は、40.2%であった。にもかかわらず、大学への進学率は57.9%を記録している。これは、大学レベルに達していないにもかかわらず大学に進学している高校生が少なくとも

---

<sup>1</sup> 大学への進学率が50%を上回ると「ユニヴァーサル段階」と呼ばれる。

<sup>2</sup> フランスの「バカロレア」のように高卒認定試験を導入することで基礎学力のない学生を振り落とすという手もあるが、入学者数の削減につながる政策には定員割れの起きている大学の反発が予想される。したがって、現状では、高卒認定試験の必須化は現実的でない。

5人に1人近い水準(17.7%)で存在するということを意味する<sup>3</sup>。注目すべきは、この比率は大学によって大きな偏りを示すということである。たとえば、中条・西垣(2007:48)は、クラスの構成が「準2級が8.7%、3級が39.1%、4級が21.7%、5級が23.9%、5級以下が6.5%」であったという報告をしている。これは、中学卒業程度学力を有している学生は47.8%であり、残りの半数は中学卒業レベルにすら達していないということの意味する。同様に、以前に私が勤務していた私立大学では、クラスにおける英検準2級の取得者の比率は7.1~10.4%程度であり、英検3級取得者を合わせても4割強であった。こういった現状は一般私大において普遍的に存在すると考えられる。というのも、定員割れを防ぐために基礎学力のない学生を受け入れざるを得ないからだ。そういった学生は自分の実力不足を自覚していることが多いが、だからといって積極的に学習するわけではない。また、「学生自主参加の形での英語リメディアル教育クラスでは特に、入試に英語を課されずに入学してきた学生の場合、英語が受験科目にないことを理由に選んだケースも多く存在し、入学当初より英語に苦手意識を持っている故に自主的な参加が望めず、真に学習してほしい学生が参加しないことが多い」(奥羽・福元 2013: 110)という現実もある。それでは、そういった学生が「面白い」と感じるのはどのような講義であろうか。

まず、高校までの授業を再現するような講義は避けなければならない。基礎学力に問題のある学生には、通常の授業を6年間受けていても英語を身に付けることができなかったという背景がある。それゆえ、高校の授業を再現しても効果は低いと考えられる。少なくともそういった授業は「面白くない」と判断されてしまうだろう。そこで、大学では、学生が関心を示すような教材を使用すべきだと考えられる。それでは、具体的にどのような教材を使用すべきであろうか。

### 3. 教材の選択

教材としては「真正性(authenticity)」が肝になると思われる。This is a penのように不自然な例文を使用するのは望ましくない。というのも、文脈から切り離された例文で英語を習得できるような学生であれば、中高の内容で躓くとは考えられないからだ。そういった学生には、そもそもリメディアルの必要がない。そこで、実例から教材を作成することが肝要になる。ただし、飛び切り魅力的な実例からだ。

#### 3. 1. 映画

映像の力は絶大だ。映像は学生を引き付ける。題材としては、特にユーモアを含むものを選

---

<sup>3</sup> 原理上は、英検準2級以上の学力を保有しているにもかかわらず大学へ進学しない高校生の数だけ実数とズレが生じる。

ぶとよい。たとえば、1959年制作の「お熱いのがお好き (Some Like It Hot)」のラストシーンはおススメだ。女装をしている男性が大富豪に真実 (=男であること) を告白するのだが、大富豪の返しが良い。最後には「完璧な人なんかいないさ (Nobody's perfect)」と言って受け入れてしまう。一連のやり取りの中に「to begin with」や「It doesn't matter」のような頻出表現が現れるので、それを学生は楽しく学ぶことができる。映画を視聴した後は、学んだ表現を実際に使わせてみるとよい。いわゆるアクティブラーニングである。

### 3. 2. 洋楽

洋楽はただ聞かせるのではなく、ディクテーション (dictation) の練習をさせるとよい。歌詞に空所を設け、穴埋め問題を解かせるわけだ。その際には、ディクトグロス (dicto-gloss) のようなグループワークも取り入れたい。共同作業にすることで、やる気のない学生を授業に参加させることができるからだ。珍答には笑いが生まれ、正解には喜びが生まれる。たとえ誤答であっても、堂々と発表できる雰囲気を作るとよい。こういったタスクには、ラポールの形成という意味合いも含まれる。いったん仲間意識が形成されると、脱落者がでなくなる。多少難しいタスクでも、友達と一緒にだと放棄することが少なくなる。授業運営の観点からもおススメの方法である。

### 3. 3. マンガ

英訳された日本のコミックは、リーディングの教材として効果が高い。ただし、学生の好みがあるので、何冊か用意して学生に好きなものを選ばせるのがよいだろう。学生に選ばせることで、自発的な学習が期待できる。教材の使い方としては、こちらで語彙のリストを用意しておく。学生には語彙のリストを参照しながらマンガを読んでもらう。各自が読み終わったら、グループワークで設問に回答してもらう。その際に、教員は読みにくい箇所の文法的な解説を加える必要があるが、押し付ける形になってはいけない。あくまで、学生が「わからないから知りたい」と感じた箇所に絞って詳細な解説を加えるのが肝要である。そのような形式だと体系的に文法を教授することができないが、特定項目の学習を効率的に進めることが出来る。思い切って体系性を捨てるというのもリメディアル教育には必要なことではないかと思う。

### 3. 4. テレビ番組

リスニングおよびスピーキングの教材として優れているのが、『関ジャニ∞クロニクル』の「英会話伝言ゲーム」というコーナーである。以下では、実際に番組で使用された例文を題材に教授法の説明を試みたい。

(1) Should I take this medicine with food? 「この薬は食後すぐに飲めばいいですか？」

このフレーズでは、1) 「薬を飲む」という場合は drink ではなく「摂取する」という発想で take を使うということ 2) should と I が連結して「シュダイ」のような音声変化が起きるということを解説する。学生には、この解説のあとに声出しをしてもらい、should I に慣れ親しむという作業を行う。なお、同じフレーズを番組内で連呼するので、リスニング力の向上にも役立つ。

「英会話伝言ゲーム」が優れているのは、誤答の面白さと親しみやすさである。リメディルの学生は英語ができない。それゆえに番組内で示される誤答に親近感を感じ、「間違えるのは自分だけではないんだ」ということで安心感を感じる。周囲の学生と一緒に間違い、笑い、学ぶ。先ほど述べたラポールの形成にも貢献する良番組である。学生が退屈そうにしているという方は、ぜひ利用してみてほしい。学生の反応が全然違うはずである。

### 3. 5. 小話

英語の正確な運用にはコロケーション(語と語のつながり)の習得が欠かせない。(2b)は「瞬間英作文トレーニング」という参考書からの引用であるが、こういった英語表現は文法的であっても自然ではない。正しいのは(2a)である。

(2) a. I'm sorry I'm late.

b. ? I'm sorry for being late.

少なくともフレーズレベルでは慣用的な表現があるわけで、学生にはそういった「自然な表現」を習得してもらう必要がある。教授の際には、自身の実体験を踏まえた雑談を通じてフレーズの習得を促すことが可能である。たとえば、以下は英国のレストランで「トイレはどこですか？」とウェイターに尋ねた時の話だ。

(3) a. I'm looking for the bathroom.

b. I'm searching for the restroom.

c. I'd like to go to the toilet.

(3a)を使用したときは「Would you like to take a shower, sir?」と返されてしまったし、(3b)を使用した際は「Would you like to take a rest, sir?」と返されてしまった。そこで、仕方なく「品がない」とされている(3c)を使用してトイレまで案内してもらったという思い出

がある<sup>4</sup>。bathroom も restroom もアメリカ英語だからイギリスでは通じなかったというだけの話であるが、こういった小話を通じて英国文化の理解を促進し、便利なフレーズを印象深く覚えてもらうという手法を私は取っている。自分の経験を有効活用して、面白おかしく伝えること。話術があれば、これ以上の教材はないと言える。

#### 4. 語彙力の養成

わからないことは楽しくない。好きこそ物の上手なれというが、実際には得意から好きになるということも多いのではないだろうか。逆に言えば、英語嫌いの学生が英語を嫌うのは、「英語ができないから」というケースが多い。そういった学生に英語を教授して感じるのは、語彙力のなさである。中学校で習うレベルの単語ですら書けないことが多い。そして、そうした学生にアンケートを取ってわかったことは、そもそも英単語が読めないから覚えられないということであった。そこで、教材のスク립トにはカタカナでルビを振ることをおススメする。リメディアルの対象になるような学生は発音記号が読めないので、彼・彼女らにとって発音記号は無意味な暗号でしかない。「カタカナ発音に徹するというのは正確さの放棄ではないか」という指摘もある。最もである。しかし、現実には即して考えると、発音記号の指導は、学生のやる気をそぐ。できるだけハードルを下げ、「一定程度の英語力」の習得を目標にするべきではないか。語彙については、多少の日本語訛りが残っていても、理解できる語彙 (passive words) を増やすことが望ましい。理解できる語彙を増やすことで教材の理解が深まり、自習も容易になる。初期段階では、使える語彙 (active words) よりも理解できる語彙の増強に専念するべきではないかと思う。

また、カタカナ発音にはメリットもある。音変化の規則を効率よく教授することができるのだ。たとえば、「leave+her=leaver (リーヴァー)」のように解説をすると、視覚的にもわかりやすい。また、初期段階では複雑な解説を避けるというのも重要である。「want to=wanna (ワナ)」のように解説をして、wanna 縮約の仕組みについては教えないというのも一手である。学生にはコンパクトな解説を手を変え品を変え繰り返す。その中で、徐々に英語の習得を促すというやり方が望ましいのではないかと思う。

#### 5. トレーニング

英語は理解するだけではダメで、トレーニングを積まないと使えるようにはならない。英語をスキルとして習得するには、暗記とトレーニングが必須なわけだが、伝統的な参考書の「基本例文の暗唱」などは、リメディアルの教材として敷居が高すぎる。そこで、英語双六など、遊んでいる間に自然にフレーズを習得できるゲームを適宜利用することが望ましい。い

---

<sup>4</sup> 今思えば、lavatory と言うべきであった。

いわゆる、タスク中心教授法 (Task-based Language Teaching) である。課題解決を通じて英語学習を進めるというわけだが、この手の教授法は「時間的なコストがかかる」という欠点がある。しかし、リメディアルの対象となる学生は、すでに3～6年ほど英語学習が遅れている。そんな状況では、「早さ」を説いても仕方がない。むしろ、ゆっくりだがしっかりと (slow but steady) と学習を進めるべきではないだろうか。そして、誰でも時間をかければできることを楽しく学ぶ、というのが現実的ではないだろうか。中学ないしは高校卒業程度の学力を目標に大学教育を行うということには賛否両論があるだろうが、「やればできる」ということを実感させることには教育の意味があると思う。学習の習慣を身に付けてもらえば、社会に出てからも新しいスキルを習得することが出来る。リメディアルの意義は、「学習するスキル」というメタスキルを学生に身に付けさせることにもあると思う。

## 6. 常識と必要性を説く

教員をしていて最もよく聞かれるのが「どうすれば英語ができるようになりますか」、という質問だ。だが、この質問をそのままに受け取って、構文解析 (parsing) や文法の必要性を説いても意味がない。聞いてくる学生の本音は「どうすれば文法を理解しないで楽をしながら英語がペラペラになれますか」という内容であることが多い。そういった学生は (学生に限らず社会人もだが)、「聞くだけで英語ができるようになる」といった教材に惹かれてしまうことがある。それゆえ、そういった教材に学生が騙されないように指導をする必要がある。たとえば、「右脳トレーニング」という教材がある。ところが、言語処理は左脳優位であり、英語は右脳で処理されるということはない (白畑・若林・須田 2004:137-146)。たとえていえば、逆立ちで走れば簡単に走れるというような立場であり、科学的根拠がない。「スピードラーニング」も同様だ。理解できないインプットは言語学習の役には立たない。労多くして益なしの学習法であるわけだが、一定数の人間が騙されるから商売として成り立っている。自分の学生がそういった教材を使用しないように注意喚起することも教師の務めであると思う。英語初級者が遠回りをしないで済むように指導をすることも重要なわけだ。これは「常識」の範疇であるが、英語学習の「非常識」が喧伝されている現状では、意外と盲点になっているのではないかと思う。

次に「学生の英語学習の必要性を説く」ことの重要性について説明を加えたい。リメディアルの学生に限った話ではないが、やる気のない学生に自発的な学習を促すには学習の必要性を実感させる必要がある。その際に「TOEIC のスコア」と就活の相関関係について話すといよい。英語学習を進めていくとわかることだが、TOEIC で 900 点程度では実用レベルに耐えない。ところが、就活では 600 点以上だと評価の対象になる。これは、TOEIC が英語力の証明というよりは、努力の証明となっていることの証左である。現在は大卒が増えすぎ、大卒であることが就活の武器にはなりえない。それゆえ、「いい就職」をするには「即戦力であること」か「将来のポテンシャルを持っていること」を示す必要がある。即戦力で

あることを示すには、使える資格を取得すればよい<sup>5</sup>。それに対し、学歴以外の手段で「ポテンシャル」を示すには、TOEIC のスコア等でアピールする必要がある。就活で TOEIC が有利に働くことを話すと、人が変わったように勉強を始める学生がいる。全員に均等に効果のある方法ではないが、「丁寧に」TOEIC の必要性を説くことは一部の学生のモチベーションを上げる。

## 7. 教授法について

究極的には、英語教育とは学生の「気づき」のサポートをすることである。それゆえに、教師が自分本位の講義を行っても実りは少ない。リメディアルでは、(4) に示されたポイントを意識する必要がある。

- (4) a. ゆっくりと教える
- b. 文法のイメージを作る
- c. 説明は細切れにする
- d. パフォーマンス重視の授業
- e. 学生に教材を選ばせる
- f. 体系性を捨てる

(4a,b,c)は学生の理解できる範囲で教えるべきだという形式で一般化できる。一般的にリメディアルクラスの学生の理解力は低い。少なくとも英語に対して適正はない。それゆえ、スモールステップで理解できていることを確認しながら講義を進める必要がある。焦ってはいけない。石橋を叩いて渡るように慎重に講義を進めるべきだ。次に(4b)についてだが、これは英文法を感覚的に理解できるように説明するということを意図している。たとえば、定冠詞の the では「お互いに了解していること＝いっせいで指させるものは the」という風に理解してもらおう。その際に数の説明(単数・複数)も一緒にしよう！などと考えるのはいけない。せいぜい a と the の対比までである。一度に詰め込もうとすると学生はパンクしてしまう。それゆえに文法的な説明は最小単位で行う必要がある。これが(4c)の意味だ。(4d)は学生を沸かせるような講義をせよ、という意味である。たとえば、指示棒はユーモアに富んだものを利用するとよい。ハロウィーンの時期であれば、ヴォルデモートの杖などを使ってもよいだろう。小道具にも手を抜かず、雑談は笑いの取れるものを用意する。「学生に楽しい！」と思わせるようなパフォーマンスがリメディアルのクラスでは必須である。次に(4e)

---

<sup>5</sup> 他にもインターンに参加するという方法もあるが、インターン先は慎重に選ぶ必要がある。というのも、「安い労働力を使いたい」というのがインターンに対する会社側の動機であり、インターン先以外では評価につながらないことも多いからだ。

についてであるが、学生に「自分で選んだ」という意識を持たせることで自発性を高めることができる。限られた時間での英語教育は難しく、自発的学習の促進が必須となる。それゆえに、学生にやる気を出させる必要がある。その点で、自分で興味のある教材を選ばせる、というのは非常に有効な手段である。最後に(4f)についてであるが、学生が興味を示した事項についてだけ説明を加えよ、という意味である。一方的に上級者向けの文法の説明をすることは避けなくてはならない。まず、リメディアルの対象となる学生は文法が嫌いであり、難しい説明に拒否反応を示す。英語嫌いを改善するうえでは、複合関係詞や疑似関係詞のような事項は避けるべきである。

## 8. 結論

本論では、どのようにリメディアル教育を行うべきかについて、実践的な観点から論じた。要約すると、1) 楽しめる教材 2) 理解可能なインプットの提供 3) 学生主体の講義 の3点が肝要であると主張した。これらはいずれも講義改善のヒントとなるものである。よい講義を提供することは、学生の再学習の大きな手助けとなろう。しかし、果てしないユニヴァーサル化は社会的なコストを高めるという点にも留意しておく必要がある。たとえば、講義をサボる学生に連絡をして呼び出すといった業務は、教員および事務員を疲弊させるものである。そこまでしても退学する学生は後を絶たない。そういった学生の量産には、選抜試験の形骸化と保護者による進学への押し付けといった背景がある。保護者は大学へ進学させることで安心し、留年・退学が迫ってくると大学側に対応を求める<sup>6</sup>。しかし、大学教育は義務教育ではない。あくまで自己責任の世界である。こちらに向かい合ってくれなければ教育のしようがない。ただ、こちらに少しでも向かってくれる学生を見捨てるような真似はしたくない。最後の砦としてリメディアルと真摯に向き合っていきたい。

### 参考文献

- 中條清美・西垣知佳子 (2007). 「リメディアル教育用英語検定学習教材の試用」. 『日本大学生産工学部研究報告 B (文系)』 40, 47-53.
- 牧野眞貴 (2013). 「<実践報告> 英語リメディアル教育対象クラスにおける授業改善の試み—スポーツ推薦入学性クラスの事例報告」. 『近畿大学法学』 61, 351-367.
- 奥羽充規・福元広二 (2013). 「大学英語リメディアル教育再考」『鳥取大学地域学論集』 9(3), 105-122.
- 酒井志延 (2016). 「リメディアル教育を必要とする学習者を自律的学習者にするための教授

---

<sup>6</sup> 極端な例でいうと、声優学校などは通っている間の安心感をお金で買っているともいえる。現状は、声優学校を卒業しても声優になれる見込みはほとんどない（声優志望者 30 万人に対して声優 300 人）。



法・教材開発」. 科学研究費助成事業基盤研究 (C)(一般) 研究成果報告書 <https://kaken.nii.ac.jp/file/KAKENHI-PROJECT-25370649/25370649seika.pdf>.

白畑知彦・若林茂則・須田孝司. (2004). 英語習得の「常識」「非常識」 第二言語習得研究からの検証. 東京：大修館書店.

## リメディアルの観点から再考する実践的な英語教育

今村 怜

### 要旨

本論では、どのような英語授業をリメディアルのクラスで行うべきかを論じた。具体的には、洋画、洋楽、マンガ、テレビ番組、小話を併用して教材を作成するべきだと説いた。また、語彙力の強化には、単語にカタカナ発音のルビを用意するべきだと論じた。教授法全般としては、学生が理解できる範囲に調整しながら教授することの重要性を論じた。それと同時に、教師は「エンターテイナー」であるべきだとも論じた。